令和６年１０月１日
江別市総合戦略推進委員会
別冊資料２

人口減少対策を考えるワークショップ
みんなで考える住み良い江別の未来
（まちづくり関係団体との意見交換）

令和６年８月３０日（金）　市民交流施設「ぷらっと」会議室
午後３時３０分～午後５時０５分

１　多文化共生の社会を実現するためには

・江別市では、パキスタン国籍の方が増えてきており、ベトナム国籍の方と同様に、必ずしも英語が通じるわけではないため、声をかけづらいところがある。また、パキスタン国籍の方は、技能実習生として江別市に来ているという訳ではなく、会社や職場で日本語や日本文化に触れる機会が多くもないため、国際交流センターなどが実施する日本語教室に参加する方が少ないと感じている。

・ベトナム国籍の方なども、会社での日本人との交流はあるものの、同国籍の方々の集団生活によるコミュニティが出来上がると、地域に出てきて交流する機会が少ないのではないかと思う。

・ベトナム国籍の方も、パキスタン国籍の方も、働いている方ではなく、家庭に残っている方や小さい子ども達への日本語サポートが必要であると感じており、小中学校ではボランティアによる日本語サポーターにも活躍いただいているが、国際交流員の声を外国籍の子ども達やそのお母さん方に届け、江別市民と外国籍の方との間で、お互いを知ること、理解することを進めたい。

・子どもが幼稚園に通っていたときに、子どもを通じてアルジェリア国籍のお母さんと交流があり、自宅にお伺いすることもあった。その方自身、イスラム教徒であり、宗教上の理由から服装の大変さがあるほか、地域の日本人の方と付き合いも多くないことから、なかなか困っていることが周りに伝えられないという話をしていた。外国籍の方へのサポートは、働いている人だけではなく、家庭にいる方へのサポートが重要なのだということは、私も強く感じたところ。

・図書館や公民館などで絵本の読み聞かせを行う取組に携わっている。江別市では、新生児のいる家庭に絵本を届けるという取組もおこなわれているが、外国籍で、母親は日本語も英語も分からないという家庭に対して、絵本を通じて地域とのつながりが生まれたという事例もある。外国籍でも小さい子ども達は、日本語への適応も早く、江別の子ども達ともつながって、遊びの輪が広がっていくので、他の文化への理解も早いのだろうと思う。一方で、外国籍の子ども達が、その家庭のケアラーになってしまう恐れもあるので、外国籍の子ども達へのサポートにも力をいれてほしい。

・江別市子育てひろば「ぽこあぽこ」の運営に携わっているが、外国籍の子どももよく見かけるようになった。パキスタン国籍の方と思われる方もいらっしゃるが、お母さんはウルドゥ語しかお話しできず、意思疎通も難しかった。その後、小学生のお子さんがお母さんとスタッフとの会話をつないでくれたが、ぽこあぽこの会員登録の方法や、内容の説明までは上手くお伝えすることができなかった。在住外国人への情報提供手段の充実として、ウルドゥ語だけではなく、複数の外国語を翻訳できるデジタル端末を幅広く導入したり、看板や掲示に複数の言語を記載したりする必要があるのであろうと感じた。

・日本語も英語も伝わらないとなると、意思疎通のハードルが高く感じてしまうが、外国の方の文化をお互いに知ることで、少しずつ壁を低くしていかなければならないと思う。そのためには、何よりも「知る機会」を増やしていくことが重要ではないだろうか。幼稚園や小学校に通う子ども達のように、毎日、他の日本人の子ども達と触れ合っているのは、まさに知る機会に溢れている状況であり、日本人の子も、外国籍の子も、壁は感じていないのではないだろか。その子ども達が起点になって、家族の付き合い、地域の付き合いと交流の輪が広がっていくことで、多文化や国際理解が進んでいけばいいと思う。いきなり、東京のように多数の外国籍の方が江別市に住むということは考えにくいかもしれないが、外国籍の方が増えていることは事実であるので、知ろうとする意識、理解しようとする意識が根付いていけばいいと思う。

・市内の小学校で、買い物の疑似体験を通じて、環境保護、リサイクル、ごみ減量の大切さを伝える「買い物ゲーム」を実施している。今日も、大麻地区の小学校で買い物ゲームを実施してきたが、パキスタン国籍と思われる児童がおり、日本語サポーターの方の支援を受けながら、楽しく勉強してくれていた。日本語サポーターを通じて、その児童に聞いてみたところ、パキスタンではごみの分別の概念があまりなかったようだが、授業などを通じて、江別市のごみの分別も分かり始めてきたと話していた。意思疎通ができれば、お互いの文化やマナー、ルールも認識できるのだと感じた。一方で、日本語サポーターは交通費の支給はあるものの、ほぼ無償のボランティアであると聞いているので、日本語サポーターのみならず、ボランティアへの支援を手厚くしてほしいと思う。

2　10年後も活発な地域活動を維持していくためには

・地域活動の課題として、「活動資金の獲得」、「活動場所の確保」、「担い手の高齢化」が挙げられる。また、市民活動団体を広く見渡しても、担当者が変わらず、世代交代できていないと感じる。

・定年も延びて、70代まで休みなく働いたあとに、すぐボランティア活動で地域に携わっていただくということも難しいと思うし、一度活動に関わったら出ていけない、辞められないと思っている方も一定数いると思う。市民活動は、好きな時に、空いた時間で気軽に行うものなのだという認識が広がって、市民活動や「協働」という言葉のハードルを下げ、若い世代から、まちに関わるのが当たり前になるようになっていけばいいと考える。

・10年前は女性の起業支援をしていたが、10年後の活動としては、ご高齢の方の起業支援などで、アクティブシニアの方の力で地域の課題解決などができたらいいなと思う。

・市のアンケート調査結果などでも、市民の「協働」に対する認知度が低いと聞いており、自治体に加入する方も少なくなってきているとのことだが、街路の花壇の整備に加わるとか、地域のお祭りに参加して盛り上げるだけでも、「協働」していると言えるので、大変だというイメージではなく、楽しくできているんだと知ってほしい。

・過去に地域活動の支援を受けたり、授業やイベントに参加したりしたという若い方が、スタッフとして参加してくれることもあり、若い方の新しい感性・アイデアをもらうことで、地域活動が活性化すると感じている。

・小さい子どもの話を我慢強く聞いて、あやしてくれるなど、おじいちゃん・おばあちゃんならではの子どもとの遊び方・関わり方もあり、3世代が交流できる活動も多くあると考えるので、元気なアクティブシニアの方にも10年後と言わず、引き続き地域活動に関わっていただきたい。

・地域活動は、ボランティアが中心であるので、楽しさや、やりがいなどが大切なところではあるが、これから10年後の地域活動を考えたとき、ボランティア活動に対して地域通貨などによる支援を強化し、地域に還元する仕組みを作るなど、地域活動を始める、続ける「きっかけ」を提供してはどうだろうか。

・地域活動だけではなく、地域におけるつながりも非常に大切であると思う。子どもの頃に、近所のおじさん・おばさんと関わっていることで、地域との関係性を強く持ってもらい、大人になっても、その地域との関係性が持続しているようになってほしい。

・若い方が江別からどんどん少なくなると、地域活動も元気がなくなってしまう。高校生の時から市外に通学するようになると、なかなか江別市の中を見ようとはしなくなると思うので、大人になっても「江別市に戻ってきたいな」と思える何かがあるとよいのではないか。それは、子どもの頃からの記憶と、地域の方との関係性であっても良いし、例えば東川町の「生まれた子どもへの『木製椅子』の贈り物」のような形に残るものであってもいい。江別市で生まれたことの記念となるようなものを贈るなど、「自分のふるさとは江別なんだ」と大人になっても愛着を持ち続けてもらえる取組があれば良いと思う。